

【アガサ・クリスティ『黄色いアイリス』例会】

【目次】

- 序章：作者紹介
- 第1章：クリスティに関するベスト 10 色々～作品紹介の一環として～
- 第2章：華麗なる探偵達～クリスティの世界その1～
- 第3章：広大なノンシリーズ～クリスティの世界その2～
- 第4章：増え続けるクリスティ～クリスティの世界その3～
- 第5章：「ポリェンサ海岸の事件」～パーカ・パインの手並み～
- 第6章：「黄色いアイリス」～エルキュール・ポアロの推理～
- 第7章：「ミス・マーブルの思い出話」～ミス・マーブルの優越～
- 第8章：「2度目のゴング」～再びエルキュール・ポアロの推理～
- 第9章：「仄暗い鏡の中に」～クリスティの幻想理論～
- 終章：忘れられぬ煌めき

【序章：作者紹介】

1890年、保養地として有名なイギリスのデヴォン州トーキーに生まれる。中産階級の家庭に育つが、のちに一家の経済状況は悪化してしまい、やがてお金のかからない読書に熱中するようになる。特にコナン・ドイルのシャーロック・ホームズものを読んでミステリに夢中になる。1914年に24歳でイギリス航空隊のアーチボルド・クリスティと結婚し、1920年には長篇『スタイルズ荘の怪事件』で作家デビュー。1926年には謎の失踪を遂げる。様々な憶測が飛び交が、10日後に発見された。1928年にアーチボルドと離婚し、1930年に考古学者のマックス・マローワンに出会い、嵐の様なロマンスののち結婚した。1976年に亡くなるまで、長篇、短編、戯曲など、その作品群は100以上にのぼる。現在も全世界の読者に愛読されており、その功績をたたえて大英帝国勲章が授与されている。（以上、早川書房のクリスティ文庫の解説）

※どうしても良いことであるが、クリスティの生家の隣人はイーデン・フィルポッツである

【第1章：クリスティに関するベスト10色々～作品紹介の一環として～】

1：クリスティ・ファンクラブのベスト10（1982年）

日本国内に存在するクリスティ・ファンクラブ（担当者もその会員）が1982年に行ったクリスティベスト10である。クリスティに関する有識者集団が選んだ物であり、非常に重要な物と考えられる。結果は以下の通り。

- 1位：『そして誰もいなくなった』（ノンシリーズ）
- 2位：『アクロイド殺し』（ポアロ）
- 3位：『オリエント急行の殺人』（ポアロ）
- 4位：『予告殺人』（マーブル）
- 5位：『ナイルに死す』（ポアロ）
- 6位：『カーテン』（ポアロ）
- 7位：『ゼロ時間へ』（バトル警視）
- 8位：『ABC殺人事件』（ポアロ）
- 9位：『葬儀を終えて』（ポアロ）
- 10位：『白昼の悪魔』（ポアロ）

良く言えば王道が出そろった、悪く言えば安定し過ぎていて面白味に欠けると言った傾向にあるが、クリスティを読む上で必須の作品群が全て出揃っている事が伺える。

2：クリスティ自選ベスト10（1972年）

クリスティ自身は「その時どきの気分で作品は変わる」としながらも、以下の様に回答している。（全て順不同）

- 『そして誰もいなくなった』（ノンシリーズ）
- 『アクロイド殺し』（ポアロ）
- 『オリエント急行の殺人』（ポアロ）
- 『予告殺人』（マーブル）
- 『火曜クラブ』（マーブル・短編集）
- 『ゼロ時間へ』（バトル警視）
- 『終わりのなき夜に生まれつく』（ノンシリーズ）
- 『ねじれた家』（ノンシリーズ）
- 『無実はさいなむ』（ノンシリーズ）
- 『動く指』（マーブル）

前者と比べてノンシリーズの台頭が目立つが、新しく入っている作品も傑作である事に変わりはなく、これはこれで納得のラインナップとなっている。

3：このネタバレには気を付けろベスト 10（2015年）

担当者の独断と偏見でネタバレにさらされやすい作品を選んだ。結果は以下の通り。

- 1位：『アクロイド殺し』（ポアロ）
- 2位：『オリエント急行の殺人』（ポアロ）
- 3位：『ゼロ時間へ』（バトル警視）
- 4位：『ABC殺人事件』（ポアロ）
- 5位：『雲をつかむ死』（ポアロ）
- 6位：『そして誰もいなくなった』（ノンシリーズ）
- 7位：『白昼の悪魔』（ポアロ）
- 8位：『ねじれた家』（ノンシリーズ）
- 9位：『ポアロのクリスマス』（ポアロ）
- 10位：『ホロー荘の殺人』（ポアロ）

圧倒的ポアロ率となった。ポアロは余り好きではないとされているクリスティであるが、彼女がポアロと共に（嫌々ながらにしても）開拓した領土の広さを改めて実感させるラインナップであろう。

4：担当者ベスト 10（2015年）

これもまた独断と偏見で担当者が現時点でのベスト 10を選んでみた。結果は以下の通り

- 1位：『そして誰もいなくなった』（ノンシリーズ）
- 2位：『ゼロ時間へ』（ノンシリーズ）
- 3位：『茶色の服の男』（ノンシリーズ）
- 4位：『おしどり探偵』（トミー&タペンス）
- 5位：『スリーピング・マーダー』（マーブル）
- 6位：『もの言えぬ証人』（ポアロ）
- 7位：『ホロー荘の殺人』（ポアロ）
- 8位：『ねずみとり』（ノンシリーズ・戯曲）
- 9位：『終わりなき夜に生まれつく』（ノンシリーズ）
- 10位：『死の猟犬』（ノンシリーズ）

様々な思い入れのある 10 作が並んだ。クリスティには戯曲では他に「海浜の午後」や「検察側の証人」という傑作がある。以上 4 つのベスト 10 を参考にして、是非ともクリスティの世界に参入して頂きたい。

【第 2 章～：華麗なる探偵達～クリスティの世界その 1～】

1：エルキュール・ポアロ～灰色の脳細胞を駆使する小柄なベルギー人～

世界的にはシャーロック・ホームズに次ぐ有名な探偵。生誕年は不明だが、19 世紀の中葉、ベルギーに生まれた。少年時代のポアロは貧乏であったこともあり、ベルギー警察に入って一生懸命に働き、国際的にも活躍する。警察を退職後に第一次世界大戦が勃発し、足を負傷したポアロは避難民として渡英。スタイルズ・セント・メアリ村に移住するが、村の郵便局で旧友のヘイスティングズ大尉と再会し、仲良く『スタイルズ荘の怪事件』というスタイルズ荘で起きた毒殺事件に巻き込まれるが、見事に解決して、自分の探偵能力に再び自信を持った。やがてロンドンに戻り、第 2 の人生、つまり英国における私立探偵業を開始することになる。ポアロの容貌を特徴づけるものは、5 フィート 4 インチの身長、いつも少し片方へ傾けている卵型の頭、なにか興奮してくると緑色に輝く眼、軍人のようにピンと立った口髭などである。問題は、頭が禿げていたがどうかであるが、額から頭の天辺にかけてのみ禿げていると考えるのが妥当のようだ（この論争は現在でも続いている深遠なる問題である）。その意味では、デイヴィッド・スーシェの演じるポアロが原作のイメージにもっとも近いといえよう。『ポアロ登場』で披露されている数々の活躍後、ポアロは一時田舎に隠退し、カボチャ作りに取り組んだこともあったが（『アクロイド殺し』）、再びロンドンに舞い戻り、ロンドン中心部のトラファルガー広場近くにあるホワイトヘイヴン・マンション 203 号室に従僕のジョージと住むことになった。コスモポリタンであるポアロは、フランスやギリシャを始め、エジプト、メソポタミヤ地方など各地を旅行している。グルメであったが、晩年の趣味の一つには探偵小説の読書と作品論の執筆があった（『複数の時計』）。そしてポアロの最後の事件『カーテン』では、懐かしきスタイルズ荘をヘイスティングズとともに再訪し、全力を尽くして犯人を追い詰めていく。いかにもポアロらしい人生の終わり方といってよいであろう。

※捜査思考：犯人はうぬぼれが強く、それ故に必ずどこかでミスをする

※唯一、死亡が判明する探偵である・どうしても良い事ではあるが、ポアロが死亡した時には本当に新聞に死亡広告が出た

※お薦めは『アクロイド殺し』・『ホロー荘の殺人』・『五匹の子豚』・『杉の柩』・『もの言えぬ証人』

2：ジェーン・マーブル～クリスティが最も愛した老婦人探偵～

ロンドン近郊の州ダウンシャーにあるセント・メアリ・ミード村に住む心優しい独身の老婦人。ピンク色の頬と澄んだ青色の眼をもつ。彼女の甥レイモンドが主催した「火曜クラブ」で、前警視総監クリザリング卿に天才的な探偵能力を認められ、素人探偵として活躍する。初登場は1928年に雑誌に掲載された短編「火曜クラブ」。その時は黒いブロードの白いふわふわしたものを編んでいた。編物は彼女の趣味のひとつだが、もっとも好きなことは村人たちの人間性の観察である。そして、この村が人間社会の縮図で、あらゆる種類の人間が生活していることを発見する。つまりマーブルの推理方法は、ある犯罪状況がこれまで観察してきた人間性の事例の中で、どれが一番似ているかを慎重に検討し、最後には正しい結論を得るというものである。また趣味とは少し違うが、孤児院を卒業した娘たちを家事見習いとして雇い、家事をしてもらうとともに、彼女たちに電話の受け答えやベッドの整頓方法などを教えて、一人前の小間使いにしようという職業訓練（要審議）も行っている。一人暮らしのマーブルによっては家事労働が減るし、経済的にも安上がりという独特のシステムを考え出している。マーブルは、当初セント・メアリ・ミード村やその近隣で起きた事件ばかりを扱っていたが、晩年にはロンドンでの射殺事件（『バートラム・ホテルにて』）や西インド諸島での毒殺事件（『カリブ海の秘密』）の解決にも関与している。ミス・マーブルは地方人として一生を送ったものの、結構旅行を楽しんでいることがわかる。晩年には目が悪く、耳も遠くなって持病のリウマチにも悩まされるが、謎を解決しようとする頭脳はまったく衰えていない。マーブル最後の事件といわれる『スリーピング・マörder』でも、ポアロとは違い、最後まで元気な姿をみせている。

※ 捜査思考：犯人も一般人故に、一般的な行動を犯行時に行う物である→自身の経験則から一般法則を導く

※ どうでもいいことであるが、当初『ナイルに死す』はポアロではなくマーブルが探偵役であった

※ NHK『ポアロとマーブル』というアニメが2004年に流されていたのをご記憶の人もいるかも知れない

※ 普段はおとなしい老婦人であるがキレると怖い：『ポケットにライ麦を』・『スリーピング・マörder』等

※ お薦めは『火曜クラブ』・『ポケットにライ麦を』・『スリーピング・マörder』

3：トミー・ベレズフォード&タペンス・ベレズフォード～鋭利な推理を武器にする陽気なスパイ夫妻～

冒険好きな夫婦。初登場は『秘密期間』で、2人の歳をあわせても45にはならない。2人は幼なじみで、第一次世界大戦中は看護婦と傷病兵で再開するが、終戦直後、ロンドンの地下鉄で出会い、お金と刺激を求めて青年冒険家紹介を設立する。そして一件落着後、めでたく結婚。6年後には国際探偵局を引き継ぐ。タペンス（結婚前はブルーデンス・カウリイ）は美人とはいえないが、大きな灰色の眼のかがやく妖精のような顔には個性と魅力がある。またトミーは赤い頭髪の典型的な紳士。2人の間にはデリクとデボラという双子とベティーという養子の3人の子供がいる。第二次世界大戦中にも情報局に協力するが、晩年は、従僕のアルバートと犬のハンニバルとともに月桂樹荘に住む。

※ 捜査思考：タペンスは頭脳派、トミーは肉体派であり、大抵トミーがえらい目に遭う・様々な探偵達の思考能力を真似て捜査に当たるといふ離れ業を『おしどり探偵』内で披露している

※ どうでも良い事であるが、担当者が最も好きな探偵である・最強のリア充探偵でもある

※ どうでも良い事であるが、『おしどり探偵』内でトミタペ夫妻はエルキュール・ポアロの真似もしており、トミタペの世界線とポアロの世界線が異なる可能性が微妙に提示されている・さらにどうでも良い事であるが、その時に参考にされている作品はポアロ唯一の冒険小説である『ビッグ4』である

※ お薦めは『おしどり探偵』・『NかMか』

4 バトル警視～最も地味な偉大なる警視～

ロンドン警視庁の大物警察官で、もっぱら微妙な政治的性質を帯びた事件を扱っている。がっしりした体格に、木彫りの面のような無表情な顔の持ち主。五人の子供がいる（『複数の時計』に登場するコリン・ラムも子供の一人で、末娘がシルヴィア）。バトルが探偵役を演じる『ゼロ時間へ』では、バトルはそのシルヴィアの窮地を救い、難解な事件を解決する。決して才気煥発なタイプではないものの、事件の真相を見抜く直観力は鋭い。

※ 捜査思考：実質的に推理を駆使するのが『ゼロ時間へ』のみなので何とも言えないが、推理の最後に犯人に対して投げかける言葉から、ほぼポアロと同じであると推察される

※ 多くの作品では猿回し的な役どころに甘んじている感があり、逆に『ゼロ時間へ』という大物のみを解決しているという点で、異彩を放っている・どうでも良い事であるが、『ひらいたランプ』ではポアロ達と楽しくブリッジをしている

※ お薦めは『ゼロ時間へ』

5 クリストファー・パーカー・パイン～一際異彩を放つ人生相談探偵～

「あなたは幸せ？でないならパーカー・パインに相談を。リッチモンド街17」という個人広告を朝刊紙に載せて、悩める人々の依頼に応ずる心の専門医、身上相談探偵。依頼者に一目で信頼感を与える、穏やかでかっぷくのいい禿頭の中年紳士。ある官庁で35年間、統計収集の事務を務めた経験から、人々の不幸を分類してその病根をさぐり、有能で魅力的な部下たちを駆使して巧みな療法をほどこす。『パーカー・パイン登場』12篇のうち、前半の6篇は、事務所への相談者を迎えて、夫婦の不和、生き甲斐や冒険への欲求、などに適切な刺激を与えて満足な結果をもたらし、後半の6篇は、中近東への旅の良く先々で、殺人、失踪、盗難などの事件にかかわって謎の解明に活躍する。

※ 捜査思考：人間の統計的パターン化、及びそこから得られる法則に基づいた捜査

※ 身上相談・人生相談探偵という新しいスタイルでミステリ界に殴り込みをかけている

※作家のアリアドニ・オリヴァや秘書のミス・レモンなど、ポアロと登場人物が被っており、短編集『パーカー・パイン登場』という題名も、もろに『ポアロ登場』を意識している・ポアロをクリスティの好みに合わせて改変したキャラクターがパーカー・パインなのかも知れない

※お薦めは『パーカー・パイン』登場

6 ハーリ・クイン～幻想という名のヴェールを纏った愛の探偵～

古いパントマイムの道化役者ハーリ・クインを思わせるふしぎな雰囲気を持つ謎の解明者。しばしば、七彩の仮想衣装をまとった姿として人々の目に映ずる。ほっそりした長身で優美に歩き、どこからともなく現れてどこへともなく去ってゆくが、その間、つねに友人のサタースウェイト氏の観察眼を通じて、過ぎ去った事件の真相を示唆し、解決に導く。そのかかわる事件はすべて恋愛がからみ、悲運の恋人たちはその生死にかかわらず彼の介入によって救われる。最後の一篇では彼自身、＜完全な、永遠の恋人＞としての自らの姿を暗示しつつ恐ろしい結末をもたらして消えてゆく。クイン氏の物語は、異界の幻想的な存在が現世の現実的な観察者との二人三脚によって構築する、とびきり異色でミステリアスな愛の世界である。

※捜査思考：現世側のサタースウェイトによる「事実の観察」と異界側のクインによる「事実の再解釈」及び、過去に遡れば遡るほど事件は解決しやすくなるというテーゼ

※クリスティ版サイモン・アークといった趣の探偵である

※尚、どうしても良い事であるが、サタースウェイトはポアロ物の一篇『三幕の殺人』にも、ポアロの友人として登場するので、聞き覚えのある人もいるだろう・斯様にクリスティの世界は様々な部分が繋がっているのであり、その世界観を整理するのも楽しみの1つと言える。

※お薦めは『謎のクイン氏』

【第3章：広大なノンシリーズ～クリスティの世界その2～】

クリスティの物語世界において、所謂「ノンシリーズ」（第2章は上げた探偵達が一切出て来ないか、或いは脇役でしか出て来ず、実質的にほぼ物語内において影響を及ぼさない物語群、と此処では定義する）の作品が大きな勢力を誇っている事は、第1章で示したランキングを見れば納得できる事と思う。此処では、その様な「ノンシリーズ」の作品群を、クリスティにおいて重要なキーワード別に解説して行きたいと思う。

1：ミステリ

マザーグースの「10人のインディアン」(残念ながら新訳では「10人の兵隊」に変えられてしまった)から導き出された不世出の傑作『そして誰もいなくなった』や今読んでも新鮮な驚きとクリスティらしいゾッとするような気分を同時に味わう事が出来る『ねじれた家』、戯曲としては異例のロングランを維持した事でも有名な「ねずみ捕り」、ロマンスと怪奇趣味、ミステリが見事に絡み合った傑作『終わりなき夜に生まれつく』等々、数え上げたらきりが無い。クリスティの「ノンシリーズ」のミステリが成功するのは、名探偵という「確実に事件を解決してくれる存在」の徹底的な排除、警察が全く役に立たないという状況設定等々、サスペンシ的な要素がミステリである事を阻害しない程度に巧みに織り込まれているのが大きな原因の1つであろうと思われる。

2：考古学

アガサ・クリスティファンクラブ会長の数藤康雄氏(担当者を暖かくファンクラブへ入れてくれた張本人である)は編著『アガサ・クリスティ百科事典』(早川書房、2004年)において、クリスティの2番目の夫であり『ニムルドとその遺跡』の著者でもあるE・L・マローワンの馴初めについて記述をしておられる。クリスティとマローワンが出会ったのは1930年の事であり、それ以降考古学的な知識を取り入れた作品を少なからず執筆している。例えば1936年の『メソポタミアの殺人』(ポアロ)は正しく考古学研究チームの中で巻き起こる奇天烈なトリックを駆使したミステリであったし、「デルファイの神託」(1934年、パーカー・パインの短編集『パーカー・パイン登場』の一作)では古代ギリシャ芸術に興味を持った息子の母親が主人公であった。いや、そんな些細な物を取り上げるよりも例えば1945年の『死が最後にやってくる』は古代エジプトを舞台にした巧みな歴史ミステリであったし(残念ながら、余り注目される事はない様だが)、1937年頃に執筆された『アクナーテン』もまた古代エジプトを舞台とした物語であった(諸々の事情で上演こそされなかったが、勿論、日本では翻訳で読む事が出来る)。いや、マローワンとの出会いをそれ程重視しなくとも、考古学に対する興味の片鱗は1924年発表の『ポアロ登場』内の「エジプト墳墓の謎」においても現れてはいた。斯様に、クリスティと考古学は重要な接点を持つものなのであり、今後はマローワンやその他当時の考古学者達の言説がいかにかクリスティの作品内に取り込まれていったのかを考える事が重要であると、個人的には考えている。

3：マザーグース

クリスティの物語世界はマザーグースによって彩られていると言っても過言ではない。ノンシリーズ縛りで行けば、「三匹のめくらのねずみ」から導き出された戯曲「ねずみ捕り」、「ちいさなねじれた家」から当時の御法度の1つを破ったとされる『ねじれた家』、そして何より「10人のインディアン」から『そして誰もいなくなった』が導き出されている事を述べておけば、一応の役目は果たすのではないだろうか。クリスティがマザーグースの歌詞を引用する場合、物語全体の暗示として扱われる場合もあれば、本当にその歌詞通りに物語が進行して行く場合もあり、「今回の作品はどちらのパターンかな？」と考えながら読み進めていくのも、楽しみ方の1つであろう。

4：冒険・スパイ

クリスティ初期の傑作である『茶色の服の男』はアン・ベディングフェルドというヒロインが元気いっぱい活躍する冒険ミステリであったし、その他にも『なぜエヴァンズに頼まなかったのか？』、『バグダッドの秘密』、『フランクフルトへの乗客』など、冒険物、スパイ物と言えるジャンルの作品を、クリスティ終生書き続けた。時にはそれがミステリと融合すると阻害要因として働いてしまう場合もあったが、概ね彼女が優れた冒険小説家・スパイ小説家であった事は、これらの作品やノンシリーズではないが、トミー&タペンス物の諸作品がどれだけでも証明してくれる事だろう。付け加えておこならば、ポアロも一度『ビッグ 4』という冒険物で大いに汗をかいている。彼はこの作品で「恋人」とも言える様な人物と出会うのだが、それが誰なのかは読んで、自身の目で確かめて頂きたい。

5：幻想・怪奇

クリスティはまた優れた幻想小説・怪奇小説の書き手でもあった。それは短編集『死の猟犬』の諸作品や「洋裁店の人形」(『教会で死んだ男』所収)、「夢の家」(『マン島の黄金』所収・恥ずかしながら未読である)、そして今回の例会で取り上げる「仄暗い鏡の中に」(『黄色いアイリス』所収)を読めば頷ける所である。クリスティのこれらの作品の優れた所は、幻想小説・怪奇小説のロジックとミステリ的なロジックが巧みに折り合わされ、適材適所に配置される事によって、より一層の幻想的な雰囲気、あるいは恐怖を読者に与える事が出来ている点にあるだろう。また、クリスティと英国において発生した「心霊主義」と呼ばれる学派、そしてそれによって派生した降霊会や霊媒師等々の幽霊に関する民間(此処で注意すべきはそれは中産階級以上に限られている点であるが)の諸文化との密接な関わり合いである。残念ながらこの点に関してしっかりと記述した論稿を今までに確認していないが、その議論は急を要する物であろう。その点に関して言えば、例えばノンシリーズの『シタフォードの秘密』においては降霊会で現れた霊が登場人物の1人の死を告げる役目を果たすし、マープル物の1つ「動機対機会」(『火曜クラブ』所収)においても、霊媒師が登場する。また、先程挙げた2つのロジックの融合は2つのジャンルの逆転をもクリスティが巧みに行う事を意味している。幻想・怪奇小説的な文脈の物語をミステリ的に反転させた傑作が『死の猟犬』には収められているし、ミステリ的な作品に怪奇趣味が見事に結合した作品として『蒼ざめた馬』を挙げるのも吝かではない。また「心霊主義」とは関わりなく、従来からある英国正統派ゴシック小説的な雰囲気のある作品もまた『死の猟犬』には収録されており、クリスティの幅の広さを感じさせる。

【第4章：増え続けるクリスティ～クリスティの世界その3～】

クリスティは1976年1月12日に85歳で亡くなったが、彼女の死後も「クリスティの世界」は広がり続けている。その点に関して、前2章で述べそこなったテーマも絡めつつ簡単に紹介しておきたい。我々がクリスティの広大な物語世界の全てをまだ見てはいないのだという事を願いつつ。

1：メアリ・ウェストマコット名義の作品群とロマンス

クリスティには、恋愛小説のみを取り扱ったメアリ・ウェストマコット名義の作品が存在する。全て挙げるならば、『愛の旋律』・『未完の肖像』・『春にして君を離れ』・『暗い抱擁』・『娘は娘』・『愛の重さ』の計6作品である。残念ながら担当者はかなりの数の作品を持ってはいるが、未だに手を出す勇気を得ていない。なぜならば、この作品群は恐らくクリスティの中では連続した物なのであり、途中から読む事は作者の意図を読み誤る危険を冒す事になるからだ。ただ、『アガサ・クリスティ百科事典』の力を借りるならば、『愛の重さ』にはクリスティ自身の体験が刻み込まれているし、『春にして君を離れ』はクリスティが最も満足のいく完成度であったと自伝で述べている。少なくとも、この6作品を読む事で、クリスティがミステリにおいても求めて止まなかったロマンスとの関係性が浮かび上がってくるのかも知れないとは思っている。それは、1度目の苦い結婚生活と2度目の嵐のような恋愛を経験したからこそ作品に刻み付ける事が出来たエッセンスなのかも知れない。ロマンスとミステリという観点から言えば、クリスティは概ね若い女性の恋愛に関しては好意的である様だ。ポアロは若い女性の庇護者であるし、ミス・マーブルは「現代風」を批判するコメントを時折挟みつつ、『ポケットにライ麦を』においては恋心を弄ばれて殺されたメイドのために怒り、犯人を疾風怒涛の勢いで追い詰めて行く。トミー&タペンスは冒険とロマンスの権化の様な夫婦スパイであるし、パーカー・パイン氏も恋愛の仲人を任せればピカイチであろう。また、ハーリ・クイン氏は至っては、彼が事件を解決すれば必ず一組のカップルが生まれるのであって、クリスティの世界における恋愛の守護聖人と言っても過言ではない。

2：自伝

クリスティには『さあ、あなたの暮らしぶりを話して』という、考古学の発掘現場における日常を描いた物とその名も『アガサ・クリスティ自伝』という2種類の本がある。前者では作家としてではなく、発掘現場において異文化に出会う一人のイギリス人女性と出会う事が出来るだろうし、後者に関してはクリスティの全ての作品を読んだ後に読めば、一層その理解を深める事が出来るだろう（残念ながら、どちらも未読である）。

3：新史料

2010年、日本のクリスティファンによって衝撃的な本が早川書房のクリスティ文庫に登場した。その名も『アガサ・クリスティの秘密ノート』（上下）である。クリスティ愛好家のジョン・カランとクリスティの甥であるマシュー・プリチャードによって世に解き放たれたこの創作ノートは、クリスティの初期構想から現在の形になるまでの思索の克明な記録であり、研究者やかなりコアなファン向けの本である事は間違いない。しかしながら、その価値はかなりの物である。また、2015年度に入ってからクリスティの新作（実際にはとある長篇に至る中途過程の中編）『ポアロとグリーンショアの阿房宮』が発売された。また、その少し前にはソフィー・ハナ『モノグラム殺人事件』が発売されている。ポアロ物の新作を他の人が書き継ぐという最近の流行に乗った作品である（担当者はまだ未読なので、評価できない）。この様に、クリスティの世界はまだ尚増殖しているのであり、今後どのような状態になるのか、それはまったく不明である。

紳士淑女の皆様へ：以下、各作品について容赦なくネタバレが書かれています・ご注意を！

【第5章：「ポリエンサ海岸の事件」～パーカー・パインの手並み～】

1：登場人物の皆様

パーカー・パイン：身上相談探偵・本作の仕掛け人

ミセス・R・チェスター：婦人・本作の依頼人にして真のターゲット

ミスター・バズル・チェスター：ミセス・R・チェスターの息子・本作のターゲットにして真の依頼人の1人

ベティ・グレッグ：バズルの婚約者・本作のターゲットにして真の依頼人の1人

ドロレス・ラモナ：皆のアイドル・その正体はパーカー・パインの事務所員の1人、マドレーヌ・ド・サラ・本作最大の仕掛け人

2：触れるべきポイント少々

1：パーカー・パインの手並み

2：依頼人とターゲットの逆転の妙

3：皆のアイドル、マドレーヌ

4：パーカー・パインにとっての「事件解決」

【第6章：「黄色いアイリス」～エルキュール・ポアロの推理～】

1：登場人物の皆様

エルキュール・ポアロ：小柄なベルギー人の探偵さん・奇妙な電話のために晩餐会に乱入する

アントニー・チャペル：ポアロの知り合い・晩餐会のメンバー

ポーリーン・ウェザビー：アントニーの婚約者・晩餐会のメンバー・被害者指定されていたが、ポアロの機転で助かる

ローラ・ヴァルデス：南アメリカ出身のダンサー・晩餐会のメンバー

スティーヴン・カーター：外交畑の男・「だんまりのスティーヴン」・晩餐会のメンバー

バートン・ラッセル：アメリカ人の実業家・晩餐会のメンバー・今回の事件の真犯人

アイリス・ラッセル：バートンの妻・4年前の晩餐会で死亡する

2：触れるべきポイント少々

1：ノンシリーズ『忘れられぬ死』との関連性

2：社会階級の異なる第3者に変装するという発想が単純な消去法を許さない件

3：ポアロ物『邪悪の家』との関連性

4：クリスティ作品における降霊会的要素の系譜

5：「黄色いアイリス」即ち、「黄菖蒲」の花言葉は「幸せを掴む」

【第7章：「ミス・マーブルの思い出話」～ミス・マーブルの優越～】

1：登場人物の皆様

ミス・マーブル：探偵好きの老夫人

ペサリック：弁護士・今回の事件についてミス・マーブルの意見を聞きに来た

ローズ：渦中の人物・もう少しで絞首刑になって死にそう

ミセス・ローズ：ローズの妻・憂鬱症・殺害される

ミス・カラザーズ：ホテルの宿泊客・馬に似た感じの独身婦人・事件の真犯人

ミセス・グランビー：ホテルの宿泊客・インド人との混血の未亡人

2：触れるべきポイント少々

1：ミス・マーブルのレイモンドネタ炸裂

2：「黄色いアイリス」と同じく、社会階級の違う人物との入替トリック

3：複雑そうに見える事柄→「何もかも簡単明瞭のように、わたしには思えますけれども」

【第8章：「二度目のゴング」～再びエルキュール・ポアロの推理～】

1：登場人物の皆様

エルキュール・ポアロ：小柄なベルギー人の探偵さん
ヒューバート・リッチャム・ロシェ：リッチャム・クローズ荘の主人・自殺と見られたが殺害されていた
ミセス・リッチャム・ロシェ：ヒューバートの妻
ハリー・デールハウス：ヒューバートの甥
ジョーン・アシュビー：ハリーの友達・ハリーに招待されてリッチャム・クローズ荘へとやって来た
グレゴリー・バーリング：客人・財界ではちょっとした名士にして山師
ジョフリー・キーン：ヒューバートの秘書・事件の真犯人
ダイアナ・クリーヴズ：ヒューバートの養女
ジョン・マーシャル：地所の管理人・ダイアナと熱々
ディグビー：執事・ゴングをゴング鳴らす

2：触れるべきポイント少々

- 1：「二度目のゴング」の意味する所
- 2：流行の「ルーズな密室」
- 3：8時12分犯行説錯誤のトリック
- 4：3に導かれたハンカチに関するミスリーディング
- 5：男女関係のミスリーディング（キーンとダイアナそれぞれ）
- 6：足跡に関して

【第9章：「仄暗い鏡の中に」～クリスティの幻想理論～】

1：登場人物の皆様

私：本作の語り手

ニール・カーズレーク：「私」の親友・「私」をバッジワージーに招待する

アラン・カーズレーク：ニールの弟

シルヴィア・カーズレーク：ニールの妹

チャールズ・クローリー：シルヴィアの当初の婚約者

デリク・ウェインライト：シルヴィアの浮気相手だと思われていたがそんな事は無かった好青年

2：触れるべきポイント少々

1：バッジワージーに代表されるゴシック的理論の反転

2：第一次世界大戦とクリスティ

3：鏡像の反転

4：クリスティのロマンス趣味

5：ミステリ的理論と幻想的理論の幸福な結合（ワットダニットの系譜）

【終章：忘れられぬ煌めき】

以上で例会は終わりである。

DMSでもっとクリスティを読む人口が、そして読まれる種類が多くなる事を願って。

それだけの価値が、この作家にはあるのだから。